

「晩秋の大きな蛾(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



ヒメヤママユの背中部分には、まるで小動物の獣毛のようにフサフサの羽毛が生えている。オスの触覚は「楯状」になっているが、これは、メスの放つフェロモン(誘引物質)を感知する為だという。この楯状の触覚が、ガ類全般の特徴の一つと言える。



ヒメヤママユの仲間は、春～夏に孵化、夏は幼虫、秋はサナギで過ごし、10月中旬から11月の晩秋に羽化して活動する。この寒い時期に何で?と思うが、他のチョウやガ活動をやめるこの時期に、生殖を行うことに意味があるのだろう。

2匹が重なっている様子もあったので、交尾をしているのかと思ったが、どちらもオスだった。どうやら、メスのほうからオスの集合地に飛んで来るといったことはないようだ。



1匹だけ黄色いガがいた。最初はヒメヤママユのメスだと思ったが、ちがった。これは「ウスタビガ」*Rhodinia fugax*のメスである。これだけヒメヤママユのオスがいるのだから、間違えて交尾しそうなものだが、そういう不埒な者はいなかった。



これも背の部分に、フサフサの羽毛がある、この寒い時期に羽化するガは、体温を維持するのに、体を震動させて発熱させるという。そのわずかな熱を逃がさない為の羽毛なのだろう。



ウスタビガは4つの眼状紋を持った成虫も美しいが、特徴的なのは繭(まゆ)だろう。秋の野に、写真のような鮮やかな緑色の繭を作る。緑色の色彩が乏しい風景の中でよく目立ち、実に美しい。